

# イスラームとトルコ民族

羽 田 明

## I

西アジア史の黎明期から活動したセム族の故郷といわれ、西アジアの文化中心に隣接していたにもかかわらず、「砂漠の国」アラビアは久しく種族や部族に分かれて争闘をこととする未開の遊牧アラブ人の住地であった。いわゆる「無明」jahiliyah の時代である。ところが、7 世紀の前半に予言者マホメットが現われてイスラーム Islam 教を唱えると、その旗じるしのもとに、はじめてアラビアの民族的統一ができ、アラブ民族が西アジア史の主役として歴史の舞台に登場することになった。これが政教一致のイスラーム帝国、いわゆるサラセン帝国の起源である。

イスラーム帝国はマホメットの死後、1 世紀ばかりの間に、アラブ民族のあいつぐ征服的移住活動によって、東はシル河以南の中央アジア Mawara' an-nahr、インダス河の下流域 Sind から、西はアフリカの北岸地方をへてイベリア半島に達する空前の大世界帝国に発展した。このような目ざましい発展はもちろん当時の世界情勢に負うところが多い。しかし、その反面、砂漠の住民の戦闘的な性格を反映したイスラームの信仰、とりわけ正しい信仰を守り、もしくはこれを拡ろめるためには武力の行使も止むをえない、というよりもむしろ行使すべきであるとする「聖戦」jihad の思想が信仰に燃える素朴なアラブ民族を渾しない征服戦争に駆り立てたという事情も看過するわけにはいかない。「聖戦」が多くの戦利品をもたらしたことがいっそうこれに拍車をかけた。

膨脹し切ったイスラーム帝国は、8 世紀の中ごろ、早くも東西の両カリフ帝国に分裂し、イラン人をはじめとする土着被征服民族の復興や次にみるようなトルコ民族の抬頭のために、急速に解体過程をたどることになる。しかし、「イスラームの平和」Pax islamica に恵まれ、イスラームの信仰と聖典コラーン Qur'an の言語という共通の地盤の上に、当時の世界交通の最大中心バグダードを最初の基地として、イランやピ

ザンツ、さらにはインドや中国など、東西の諸文化要素を攝取・融合した世界的なイスラーム文化が開花したのはむしろこのころ以後のことであり、イスラーム帝国は解体しても、イスラーム世界 *dār al-islām* はそのまま生き残ったのである。というよりも、むしろ非アラブ民族、ことにイラン民族やトルコ民族の活動によって、その内容を豊かにしながら中央アジア、インド、東南アジア、小アジア、アフリカ奥地へと拡大していったのである。なかでも、東方ではパーミールを越えて中国の辺境まで、また南方ではアフガーニスタンからインドへ、西方では小アジア *Anadolia* からバルカンへのいちじるしい拡大はほとんどトルコ民族の活動の結果であったといつてよい。

## II

アルタイ山脈左右の地方を故郷としたと考えられる遊牧トルコ民族はかなり早くから歴史の舞台に姿をみせている。ことに、6世紀から7世紀にかけて、北方アジアの草原地帯一帯に拠って、イランの東北境から中国の北辺におよぶ大遊牧帝国をたてた古代トルコ（突厥）族の活動は世界的にトルコ民族の存在を示したものであった。ただ、彼らの活動の範囲はパーミール東西の地方からアフガーニスタンにおよんだとしても、その生活の本拠は終始北方の草原地帯におかれていた。有史以来、中央アジア南半のオアシス地帯の住民として、東西の交通を媒介し、東西の文化交流に重要な役割を演じてきたインド・ヨーロッパ系の民族に代わってトルコ民族がパーミール東西の地方を占拠し、これらの地方が「トルコ人の国」*Turkistān* とよばれるようになったのは、結局9世紀の中ごろのウイグル（回紇）族の移住以後のことにはすぎない。

トルキスタンの成立は、中央アジア史にとってはもとより、西・南アジア史にとっても決定的な大事件であった。というのは、上のウイグル族の一部がイスラーム教に改宗したのがきっかけとなって、はじめてイスラーム教がパーミール以東に広がるばかりでなく、イスラームの旗じるしのもとに民族戦線を統一した遊牧トルコ諸部族のあいつぐ西南移動によって、西・南アジア史の局面が一変するにいたったからである。

このような形勢は、奴隸もしくは傭兵 *mamlūk* として、早くから分散的に東カリフ帝国内に潜入していったトルコ人の活動がその前提となったとも考えられる。ただ、それにしても、11世紀におけるセルジュック帝国の出現に示されているように、トルコ民族が西アジア史展開の主動勢力として目ざましい活躍を演じる一方、イラン人、アフガン人とともに、インドに進出して南アジア（インド）のイスラーム化に積極的な役割

を果し、イスラーム世界拡大の原動力となったのは、結局トルキスターンの成立以後の事実であったことを認めざるをえない。トルキスターンこそトルコ民族の西南移動の通過基地、いな跳躍台だったのである。

東カリフ帝国の息の根を止め、イスラーム世界を席捲した異教徒モンゴル族の驚異的な征服も、イスラーム世界の代表的な勢力にまでなったトルコ民族の活動に致命的な打撃を与えるものではなかった。14世紀の末、イル汗国の圧迫によるアナトリア・セルジュック朝の崩壊に乗じて独立し、イスラーム教徒の宿敵ビザンツ帝国を滅して16世紀にはアジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸にまたがる世界帝国となったオスマーン・トルコ朝の発展はこれを物語っている。いな、バルトリドが正しくも指摘しているように (V. V. Bartold, *Musulman Culture*, translated by Shahid Suhrawardy, Univ. of Calcutta, 1934, p.119 seqq.), 新しい分子を加えて、トルコ民族の活動はむしろいっそう活発化したとみなければならない。トルキスターンを基地としてトルコ化し、イスラーム化したモンゴル族、いわゆるチャガタイ・トルコ人の英雄チムールの崛起、東方におけるトルコのイスラーム文化の発達に一時期を画したチムール帝国の繁栄、その後身でインド・イスラームの最盛期を現出したムガル朝の発展などはみなその例である。チムール帝国の解体後、サファールヴィー朝のもとに民族的独立を回復したイランでも、そののちはやはりトルコ系の王朝がつぎつぎに君臨したというのが真相である。

### III

16世紀の末、17世紀の初めころまで、イスラーム世界はまだ創造的な活動力にみちていた。西アジアにおけるオスマーン帝国やサファールヴィー朝ペルシア帝国、インドにおけるムガル帝国などがいずれもこのころ極盛期をむかえた事実はその証拠である。15世紀の末ころ以後、あるいは喜望峯を廻って、あるいは大西、太平洋を西航して東南アジア、南アジアに進出しはじめたポルトガル人やイスパニア人はまだ沿岸、島嶼に通商基地を築いたにすぎず、ウラルを越えて東進を開始したロシア人もせいぜいシベリアの未開地域を征服しただけで、大陸内部の強国を相手にするほどの力はなかった。

ところが、ポルトガル、イスパニアに代わって、まずオランダ、ついでイギリス、フランスなどがより積極的に海上に発展し、東洋貿易の覇権を争うようになった17世紀以後になると、イスラーム世界の没落はようやく目だってきた。古い伝統をもつ村落共同体の組織やカーストの制度が大した変化もなしに残っていたインドはもちろん、余りに

#### イスラームとトルコ民族

も前近代的な要素が多かった西アジアの諸国は内部から崩壊し、多かれ少なかれ植民地化しはじめたからである。

ことに、18世紀の後半から19世紀の前半にかけて、産業革命をへたのちの歐洲列強の進出は目ざましく、その植民地獲得競争がいわゆる帝国主義の段階にはいった19世紀の末、20世紀の初めころには、東南アジア（インドネシア、マライ）はオランダ、イギリスの、南アジア（インド）はイギリスの、中央アジア（西トルキスタン、アフガニスタン）はロシア、イギリスの制圧するところとなった。一方、イスラーム世界の中枢部に当る西アジアでは、まずオーストリア、ロシアの、ついでイギリス、フランスなどの進出のためにその属領地の大部分を失なったオスマーン帝国は列強の共同植民地化して、「ヨーロッパの病人」とよばれるような惨めな状態におちいった。また、長い歴史を誇るイランも第1次大戦の直前には、ドイツの東進を恐れたイギリス、ロシアによって南北の勢力圏に分割され、ほとんど独立を失うにいたった。

このような情勢のもとに、19世紀の後半以後、イスラーム世界、とくに西アジアの諸民族の間では、近代化への努力の一環として、前近代的な土着支配政権に対する革命運動、帝国主義列強からの解放運動がしだいにさかんになってきた。ことに、イスラーム世界の宗主国的立場において内外の矛盾に悩むことが深刻であったオスマーン帝国では、もっともさかんで、フランス革命の思想をうけつぎながらも、外国勢力の圧迫および国内の専制からの「自由」、征服民族であるトルコ民族とその他の被征服民族との「平等」、イスラームに代わる統一の基礎としての「愛国心」という独自の基本的な政治観念を育てあげ、「進歩」と「組織」の指導理念のもとに徹底した思想革命、精神革命をなしとげた。第1次大戦の敗北によって事実上死滅したオスマーン帝国の残骸のうちから、政教分離をはじめとする全面的な西欧化によって、近代国家としてのトルコ共和国が蘇生したのも決して偶然でない。The Emergence of Modern Turkey, Oxford, 1961の著者 B. Lewis は、「かつて進んでイスラームを奉じることによって新生面を拓いたトルコ族は、今また完全な西欧化によって再生の道をえた」という意味のことを述べている (cf. Ch. XV)。ソ連邦に属する中央アジアのトルコ系諸共和国のことはしばらくおく。自由陣営もしくは中立陣営に属しながらも、現在なお近代化の遅れているイスラーム諸国家は、それぞれの国情の違いはあるにせよ、苦難のうちに自力で近代化を達成したトルコ共和国の経験からもっとも多くものを学びうるのではあるまいか。

（筆者は京都大学教養部教授）